四、人体氣運動の基本模式は、「枢軸-輪周-輻網」が調和しながら運行する円運動である

すでに述べたことではあるが、『陰陽五行』モデルは宇宙間一切事物及び存在の総合モデルであって、中医学術中の『臓腑』モデルは『陰陽五行』モデルを中医学中において具体的に運用したものである。つまり、前者は後者の変遷と類比である。同時に、このモデルの発生は、我々祖先による季節と気候変化の観察、そして、そこから生ずる日、月、地、以上三者の関係に対する認識から来ている。

近年来、中医学の思考方式を研究する学者は少なくなく、中医思考方式を「システム論的思考」と考え、西洋医学の「要素還元論的思考」と区別している。実に的を射ていると思う。例えば、祝世納教授は《中医系統論与系統工程学（中医システム論とその応用学）》（2002年2月中国医薬科技出版社による出版）において、以下のように指摘している。

「一般システム理論の階層論は以下のように強調する。つまり、あらゆる具体的事物を研究するに際し、それら事物すべてをその属する所の階層序列の中に収めるべきで、そして、それらの上向き、また、下向きの相互関係から、その状態と変化を認識する。これはシステム論的方法の主要内容の一つである。」

実のところ、中医経典の著作《内経》はすでにこの観点を明確に説明している。即ち、宇宙を母系統（システム）として、人体を子系統（システム）とする。両者の間にはちょうど同型の階層関係があり、それゆえ、《霊枢・歳露》では『人与天地相参也，与日月相応也。』こう言っている。

筆者は以上の観点に立脚し、「人体氣運動の基本モデル（或いは「人体氣運動のシステム状態モデル」とも言える）」に深く踏み込んで議論することで、この模式或いはモデルは『「枢軸-輪周-輻網」が調和しながら運行する円運動である』ことを明確に説明し、そして、一枚の『人体氣運動基本模式図』を描いた。

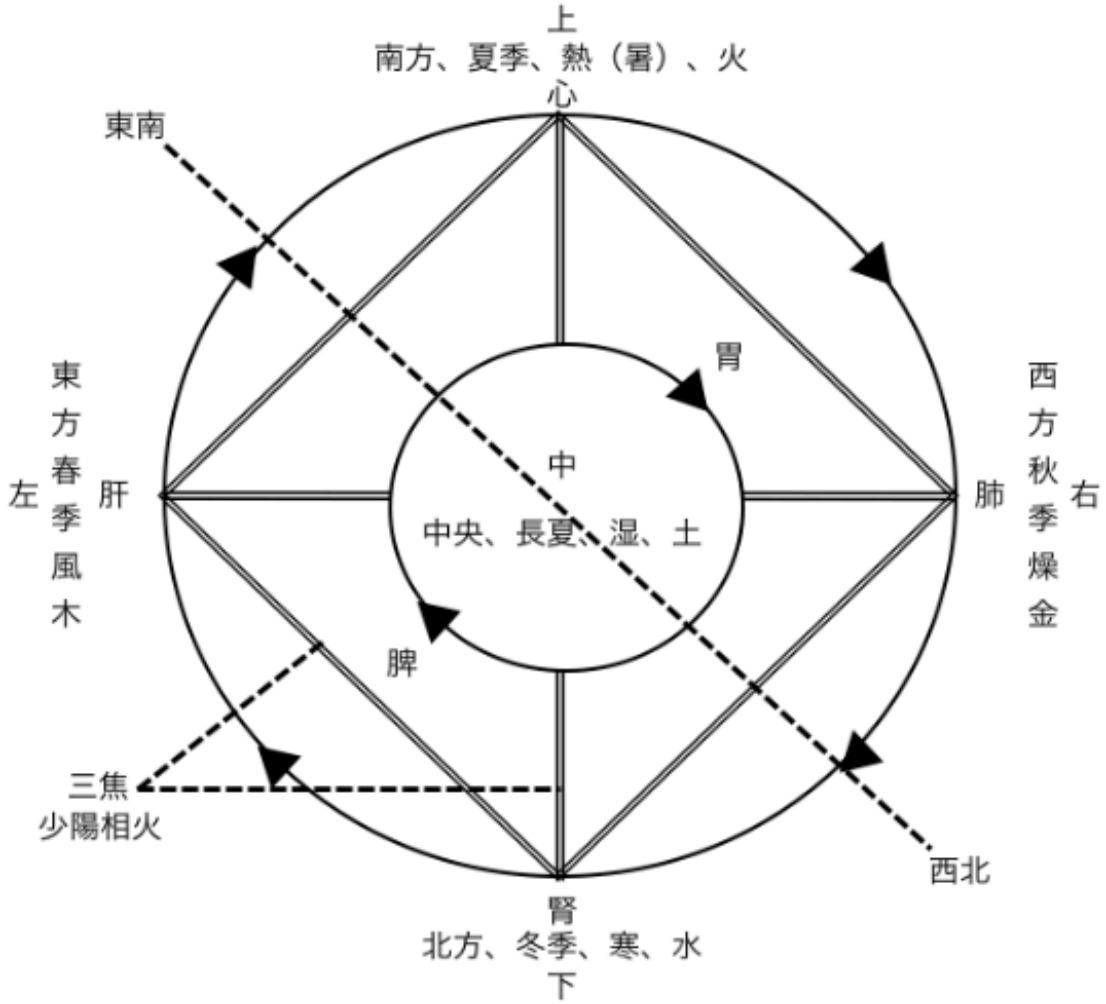

図１　人体氣運動基本模式図（後天）

この図が内包する所の中医基礎理論を正確に理解かつ運用することは、中医すべてに渡る辨証論治体系の発展にとって、きっと助けとなるだろう。

陰陽五行学説は中華民族祖先が持つことのできた大きな智慧であり、これは中国古代農耕社会に伴う自然環境が決定したものである。中国古代人たちは主に黄河流域の中原一帯に生活しており、この地域で自然界の観察を行った。

その空間と時間即ち方位と季節、そこから生まれる気候変化の特徴、それらは世界で類を見ないものであった。《内経》の所謂『東方生風』、『南方生熱』、『中央生湿』、『西方生燥』、『北方生寒』はその証だ。そして、ちょうど、東、南、中、西、北と風、熱、湿、燥、寒、それに伴う春、夏、長夏、

秋、冬、以上五季の変化は、陰陽五行学説の形成に必要な客観条件を与えた。

古代人は中原の大地において、早朝、南に向かって立ち[『聖人南面而立』《素問・陰陽離合論》]、まず上（前）南、下（後）北、左東、右西、それから、自ら大地に立っている中央、以上五つの方位を確立した。続いて、宇宙の星々、特に太陽が東方から南方へ、そして西方へ、北方へと休むことなく回転しているのを観察した。一日の中に昼夜の時間、暖冷の違いがあるだけでなく、一年五季もそれに従って生じ、気候もそれに伴い変化した。太陽は東方から昇り、西方から降る。これは陰陽の運動変化を体現していた。そして、春、夏、長夏、秋、冬、以上の五季。春は風が多く樹木が枝を伸ばし、葉が芽吹く季節。ちょうど『木曰曲直』をあらわしていた。夏は炎熱で万物は旺盛に茂る季節。ちょうど『火曰炎上』をあらわしていた。長夏は湿気が多く、万物が栄え成熟する季節。ちょうど『土爰稼穡』をあらわしていた。秋は乾燥が多く木枯らしが吹く粛殺の季節。ちょうど『金曰従革』をあらわしていた。冬は厳寒結氷、生物が引き篭もって眠る季節。ちょうど『水曰潤下』をあらわしていた。ここから陰陽五行が日の本に現れたのである。陰陽五行学説は確かに古代人が自然界の季節と気候の変化を観察することによって生まれたのだ。

《素問・宝命全形論》曰く、『人以天地之氣生，四時之法成』。ヒトは他の生物と同様に自然界の中で生きている。その内部構造と生理活動及び自然界の季節気候は密接に関係し合っている。それゆえ、《素問・金匱真言論》は『五臓応四時，各有収受』こう述べる。『収受』というのは、相互に応ずる、通ずるの意である。この理論の指導の下、古代の医師たちはもう一歩推し進めて、陰陽五行と人体五臓との間にある関係性を明らかにした。即ち、春は東方風木に属し、肝と相通ずる。夏は南方熱（暑）火に属し、心と相通ずる。長夏は中央湿土に属し、脾と相通ずる。秋は西方燥金に属し、肺と相通ずる。冬は北方寒水に属し、腎と相通ずる。以上、これらの観点は《素問・陰陽応象大論》と《素問・金匱真言論》において、すべて明確な論述がある。ここでは細かく述べないから、各自原文に当たって頂きたい。

一年四季は不断に運動している。それは《素問・六元正紀大論》が言う所の『春氣西行，夏氣北行，秋氣東行，冬氣南行』と合致する。上は陽を為し、下は陰を為す。陰は昇り、陽は降る。それゆえ、上に在る夏氣は南から西

へ、そして北の地へと下降する。下に在る冬氣は北から東へ、そして南の天へと上昇する。即ち、陽氣は右から降り、陰氣は左から昇る。周ってはまた始めに戻り、とめどなく回転している。それは自然界の氣機昇降が実際のところ一種の「円運動」だということをあらわしている。人体の氣運動もまた必然的にそれと対応し、そこから、人体氣運動基本模式が生まれる。

この問題について、《素問・五運行大論》はこう明瞭に述べている。『風寒在下，燥熱在上，湿氣在中，火游行其間也。』清代の医師張隠庵は《黄帝内経素問集注》の中で、以上の文言を解釈する際に以下のように言っている。「此言六氣之游行於天地上下之間也。・・・朱永年曰，肝腎在下，心肺居上，土位中央，三焦之火游行於上下之間，人與天地參也。」つまり、風、寒、熱（暑）、湿、燥、火と人体臓腑は相互に対応しているのだから、そのまま人体氣運動基本模式図（図１）として描き出すことができる。

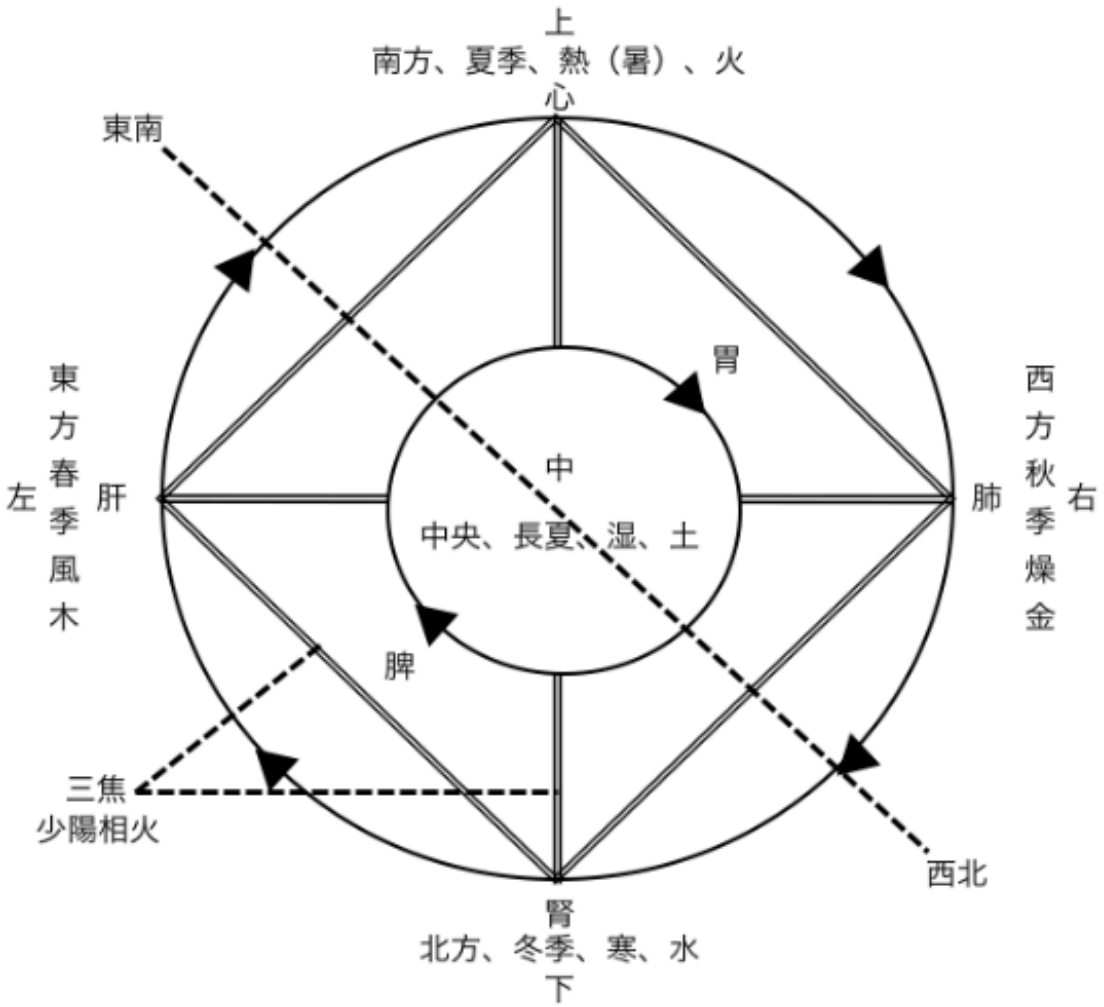

図１　人体氣運動基本模式図（後天）

この図について説明しなければならないのは、張隠庵は朱永年の言葉を引用して「土位中央」と言っていることである。明らかに、「土は陰陽に分かれる」このことを考慮している。脾は陰土を為し、胃は陽土を為す。両者は氣運動の中で特殊な作用を持つ。それゆえ、脾を以って胃の代替とし、「脾位中央」とだけ言うことはできないのだ。このことを鑑みると、この図において東南から西北に向かって一本の破線を引く必要が出てくる。それにより、肝、腎、脾は総じて陰に属し、心、肺、胃は総じて陽に属するのを見て取ることができる。陰は左から昇り、陽は右から降りる。その回転状態は一目瞭然である。三焦の火がその間を游行していることについては、「輻網」（以下で詳述する）の形式を以って表示することができる。

この図は三方面の内容を表している。
第一に、『風寒在下，燥熱在上』、即ち、肝、心、肺、腎が氣運動の「輪周」を為している。

風、寒、燥、熱は実質的に春、冬、秋、夏、以上の四季を指す。春冬は陰に属するから『在下』となり、秋夏は陽に属するから『在上』となる。春、夏、秋、冬は一年ごとに休むことなく回転しており、そして、長夏と比較すると外に位置するから、「外輪」と見なすことができる。これが氣運動の「輪周」である。従って、清代の医師周学海は《讀医随筆》において、「四時之氣，春生夏長秋収冬蔵，其行也，如輪之轉旋至圓者也。」こう言っているのである。

この問題について、《素問・金匱真言論》に早くも論述があり、私たちにインスピレーションを与え、今一歩理解を重ねることができる。

『夫言人之陰陽，則外為陽，內為陰；言人身之陰陽，則背為陽，腹為陰・・・所以欲知陰中之陰、陽中之陽者，何也？為冬病在陰，夏病在陽，春病在陰，秋病在陽。・・・故背為陽，陽中之陽心也，背為陽，陽中之陰肺也，腹為陰，陰中之陰腎也，腹為陰，陰中之陽肝也，腹為陰，陰中之至陰脾也。此皆陰陽表裏內外雌雄相輸應也，故以應天之陰陽也。』

以上の話は春冬が陰に属することを明確に指摘しているだけでなく、夏秋は陽に属し、そして、背と腹の陰陽上下の区別からも、春冬は下に在り、夏秋は上に在る道理を見出すことができる。この図に東南から西北に向かって一

本の破線を引かなければならないのはこの為で、それにより以上の道理を示しているわけだ。それは同時に、心は陽中之陽、肺は陽中之陰、腎は陰中之陰、肝は陰中之陽、以上のことも示している。《素問・五運行大論》曰く、『上者右行，下者左行，左右周天，余而復会也。』春、夏、秋、冬はとめどなく輪旋回転している。人体の肝、心、肺、腎の氣運動もまたそうなのである。

第二に、『湿氣在中』、即ち、脾胃が氣運動の枢軸を為している。
明代の医師張景岳は《類経》の中で『湿氣在中』を解釈する際、以下ように言っている。「地者土也，土之化湿，故曰湿氣在中。」ここで張氏は湿氣を地氣に帰属させており、明らかに、風、寒、燥、熱と陰陽内外の区別をしている。それゆえ、『在中』となる。同様に、脾は土に対応し、四臓の中に位置する。上で《素問・金匱真言論》にある『腹為陰，陰中之至陰脾也。』この文を引用したのもそのためである。つまり、肝、心、肺、腎、以上四臓は外輪に在り、その中で腎は『陰中之陰』の臓であるとしても、脾が中央に位置することと比べると、やはり外である陽の列に属する。このために、脾を『陰中之至陰』と称している。ここでいう「至」は「最も」の意で、その位置が「最陰」即ち「最内」であることを意味する。

ところで、ここで指摘するに値するのは以下のことである。つまり、《内経》が言う所の『至陰』には、尚、《素問・六節臓象論》にある以下の話も含まれる。『脾、胃、大腸、小腸、三焦、膀胱者，倉廩之本，・・・此至陰之類，通於土氣。』以上のことからわかるのは、『至陰』は単に脾臓だけを指して言っているのではないということだ。つまり、土は陰陽に分かれ、脾は陰土を為し、胃は陽土を為す。《霊枢・本輸》曰く、『大腸、小腸皆属於胃』。この従属関係から、三焦、膀胱もまた胃と密接なつながりがあるといえよう。それゆえ、ここでは、『至陰』は脾と胃二者を指して言っていると考えるのが妥当である。『湿氣在中』は脾と胃の二者を指していると解する。

脾は陰に属し、昇るのを主とする。胃は陽に属し、降るのを主とする。一昇一降、共に水谷之海、氣血が生化[生れて化ける]の源を為す。

全身の臓腑器官生理活動のエネルギー源は脾胃の供給に依っている。したがって、脾胃は身体全体の動力の所在である。このように、肝、心、肺、腎

が回転する外輪を為すとすると、脾胃はちょうど推進力を持つ内軸を為す。軸が動き、輪が回転する。それゆえ、先人たちは、脾胃を全身氣運動の枢軸と見なした。尤在泾は《金匱心典》の中でこう言っている。「中者四運之軸而陰陽之機也。」また、黄坤載は《四聖心源・巻四・中氣》の中でこう言っている。「脾昇則腎肝亦升，故水木不鬱；胃降則心肺亦降，故金火不滞。・・・中氣者，和済水火之機，升降金木之軸。」[升は昇の意]二人とも同じ道理を言っているのがわかる。

第三に、『火游行其間』、即ち、三焦は氣運動の輻網を為している。前述したように張隠庵は朱永年の文を引用し、「三焦之火游行於上下之間」こう述べている。ここでいう「上下」は「内外」も含み、実際には、「陰陽」の意味である。三焦の火は少陽相火を為し、心火が少陰君火（即ち、六氣の暑）に属するのとは異なる[六氣とは風、寒、暑、湿、燥、火]。張氏が「三焦の火は全身上下内外の間を游行している」と指摘していることは、非常に重要な論述であり、古今の医師たちの多くが注意を向けてこなかった問題である。

三焦の火が全身上下内外の間を游行していると指摘することは、実質的に三焦の位置が全身上下内外に在ると指摘することでもある。それは図上に反映し、輪周と枢軸の間に位置している。その機能は車輪と車軸の間の輻[や]のようでありながら、網状の特徴も備えている。それを説明するのにイメージしやすく便利であるから、筆者は「輻網」と呼ぶことにする。

《内経》の作者は三焦を極めて重視しており、論述は豊富かつ全面的で、帰納してまとめると、およそ三方面に分けられる。

©中国中医薬出版社&合同会社本質と実践